

醜い家鴨の子

DEN GRIMME AELLING

ハンス・クリスチャン・アンデルゼン

Hans Christian Andersen

菊池寛訳

それは田舎の夏のいいお天気の日のこと。もう黄金色になった小麦や、まだ青い燕麦や、牧場に積み上げられた乾草堆など、みんなきれいな眺めに見える日でした。こののとりは長い赤い脚で歩きまわりながら、母親から教わった妙な言葉でお喋りをしていました。

麦畑と牧場とは大きな森に囲まれ、その真ん中が深い水溜りになっています。全く、こういう田舎を散歩するのは愉快的な事でした。

その中でも殊に日当りのいい場所に、川近く、気持のいい古い百姓家が立っていました。そしてその家からずっと水際の辺りまで、大きな牛蒡の葉が茂っているのです。それは実際がいぶん丈が高くて、その一番高いのなどは、下に子供がそっくり隠れる事が出来るくらいでした。人がまるで無くて、全く深い林の中みたいです。この工合のいい隠れ場に一羽の家鴨がその時集について卵がかえるのを守っていました。けれども、もうだいたい時間が経っているのに卵はいつこう殻の破れる気配もありませんし、訪ねてくれる仲間もあまりないので、この家鴨は、そろそろ退屈しかけて来ました。他の家鴨達は、こんな、足の滑りそうな土堤を上って、牛蒡の葉の下に坐って、この親家鴨とお喋りするより、川で泳ぎ廻る方がよっぽど面白いのです。

しかし、とうとうやっと一つ、殻が裂け、それから続いて、他のも割れてきて、めいめいの卵から、一羽ずつ生き物が出て来ました。そして小さな頭をあげて、「ピーピー。」と、鳴くのでした。

「グワツ、グワツってお言い。」
と、母親が教えました。するとみんな一生懸命、グワツ、グワツと真似をして、それから、あたりの青い大きな葉を見廻すのでした。

「まあ、世界つてずいぶん広いもんだねえ。」

と、子家鴨達は、今まで卵の殻に住んでいた時よりも、あたりがぐつとひろびろしているのを見て驚いて言いました。すると母親は、

「何だね、お前達これだけが全世界だと思ってるのかい。まあそんな事はあっちのお庭を見てからお言いよ。何しろ牧師さんの畑の方まで続いてるって事だからね。だが、私だつてまだそんな先きの方までは行つた事がないがね。では、もうみんな揃つたらうね。」

と、言いかけて、

「おや！ 一番大きいのがまだ割れないでるよ。まあ一体いつまで待たせるんだろうねえ、飽き飽きしちまつた。」

そう言つて、それでもまた母親は巢に坐りなおしたのでした。

「今日は。御子様はどうかね。」

そう言いながら年とつた家鴨がやつて来ました。

「今ねえ、あと一つの卵がまだかえらないんですよ。」

と、親家鴨は答えました。

「でもまあ他の子達を見てやつて下さい。ずいぶんきりよう好しばかりでしょう？

みんな父親そつくりじやありませんか。不親切で、ちつとも私達を見に帰つて来ない父親ですがね。」

するとおばあさん家鴨が、

「どれ私にその割れない卵を見せて御覧。きつとそりや七面鳥の卵だよ。私もいつか頼まれてそんなのをかえした事があるけど、出て来た子達はみんな、どんなに気を揉んで直そうとしても、どうしても水を恐がつて仕方なかった。私あ、うんとガアガア言つてやつたけど、からつきし駄目！ 何としても水に入れさせる

事が出来ないのさ。まあもつとよく見せてさ、うん、うん、こりやあ間違いなし、七面鳥の卵だよ。悪いことは言わないから、そこに放つたらかしときなさい。そい

で早く他の子達に泳ぎでも教えた方がいいよ。」

「でもまあも少しの間ここで温めていようと思えますよ。」
と、母親は言いました。

「こんなにもう今まで長く温めたんですから、もう少し我慢するのは何でもありません。」

「そんなら御勝手に。」

そう言い棄てて年寄の家鴨は行つてしまいました。

とうとう、そのうち大きい卵が割れてきました。そして、

「ピーピー。」

と鳴きながら、雛鳥が匍い出してきました。それはばかに大きくて、ぶきりようでした。母鳥はじつとその子を見つめていましたが、突然、

「まあこの子の大きい事！　そしてほかの子とちつとも似てないじゃないか！　こりやあ、ひよつとすると七面鳥かも知れないよ。でも、水に入れる段になりや、すぐ見分けがつくから構やしない。」

と、独言を言いました。

翌る日もいいお天気で、お日様が青い牛蒡の葉にきらきら射してきました。そこで母鳥は子供達をぞろぞろ水際に連れて来て、ポシヤンと跳び込みました。そして、グワツ、グワツと鳴いてみせました。すると小さい者達も真似して次々に跳び込むのでした。みんないったん水の中に頭がかくれましたが、見る間にまた出て来ます。そしていかにも易々と脚の下に水を掻き分けて、見事に泳ぎ廻るのでした。そしてあのぶきりような子家鴨もみんなと一緒に水に入り、一緒に泳いでいました。

「ああ、やつぱり七面鳥じゃなかったんだ。」
と、母親は言いました。

「まあ何て上手に脚を使う事したら！　それにかからだもちやんと真つ直ぐに立てて

るしさ。ありや間違いなしに私の子さ。よく見りや、あれだつてまんざら、そう見つともなくないんだ。グワツ、グワツ、さあみんな私に従いてお出で。これから偉い方々のお仲間入りをさせなくちゃ。だからお百姓さんの裏庭の方々に紹介するからね。でもよく気をつけて私の傍を離れちゃいけないよ。踏まれるから。それに何より第一に猫を用心するんだよ。」

さて一同で裏庭に着いてみますと、そこでは今、大騒ぎの真つ最中です。二つの家族で、一つの鰻の頭を奪いあっているのです。そして結局、それは猫にさらわれてしまいました。

「みんな御覧、世間はみんなこんな風なんだよ。」

と、母親は言つて聞かせました。自分でもその鰻の頭が欲しかったと見えて、嘴を磨りつけながら、そして、

「さあみんな、脚に気をつけて。それで、行儀正しくやるんだよ。ほら、あつちに見える年とつた家鴨さんに上手にお辞儀おし。あの方は誰よりも生れがよくてスペイン種なのさ。だからいい暮しをしておいでなのだ。ほらね、あの方は脚に赤いきれを結えつけておいでだろう。ありやあ家鴨にとつちやあ大した名誉なんだよ。つまりあの方を見失わない様にしてみんなが気を配つてる証拠なの。さあさ、そんなに趾を内側に曲げないで。育ちのいい家鴨の子はそのお父さんやお母さんみたいにほら、こう足を広くはなしてひろげるもんなのだ。さ、頸を曲げて、グワツつて言つて御覧。」

家鴨の子達は言われた通りにしました。けれどもほかの家鴨達は、じろつとそつちを見て、こう言うのでした。

「ふん、また一孵り、他の組がやって来たよ、まるで私達じやまだ足りないか何ぞの様にさ！ それにまあ、あの中の一羽は何て妙ちきりんな顔をしてるんだろう。あんなのここに入れてやるもんか。」

そう言ったと思うと、突然一羽跳び出して来て、その頸のところを噛んだのでした。

「何をなさるんです。」

と、母親はどなりました。

「これは何にも悪い事をした覚えなんか無いじやありませんか。」

「そうさ。だけどあんまり図体が大き過ぎて、見つともない面してるからよ。」と、意地悪の家鴨が言い返すのでした。

「だから追い出しちまわなきや。」

すると傍から、例の赤いきれを脚につけている年寄家鴨が、

「他の子供さんはずいみんなきりよう好しだねえ、あの一羽の他は、みんなね。お母さんがあれだけ、もう少しどうにか善くしたらよさそうなもんだのに。」と、口を出しました。

「それはとても及びませぬ事で、奥方様。」

と、母親は答えました。

「あれは全くのところ、きりよう好しではございませぬ。しかし誠に善い性質をもっておりますし、泳ぎをさせますと、他の子達くらい、——いやそれよりずっと上手に致します。私の考えますところではあれも日が経ちますにつれて、美しくなりたぶんからだも小さくなる事でございましょう。あれは卵の中にあまり長く入っておりますましたせいで、からだつきが普通に出来上らなかつたのでございませぬ。」

そうやって母親は子家鴨の頸を撫で、羽を滑かに平らにしてやりました。そして、

「何しろこりや男だもの、きりようなんか大した事じゃないさ。今に強くなつて、しつかり自分の身をまもる様になる。」

こんな風に呟いてもみるのです。

「実際、他の子供衆は立派だよ。」

と、例の身分のいい家鴨はもう一度繰返して、

「まずまず、お前さん方もつとからだをらくになさい。そしてね、鰻の頭を見つけたら、私のところに持つて来ておくれ。」

と、附け足したものです。

そこでみんなはくつろいで、気の向いた様にふるまいました。けれども、あの一番おしまい殻から出た、そしてぶきりような顔付きの子家鴨は、他の家鴨やら、その他そこに飼われている鳥達みんなからまで、噛みつかれたり、突きのめされたり、いろいろからかわれたのでした。そしてこんな有様はそれから毎日続いたばかりでなく、日に増しそれがひどくなるのでした。兄弟までこの哀れな子家鴨に無慈悲に辛く当って、

「ほんとに見つともない奴、猫にでもとっ捕った方がいいや。」

などと、いつも悪体をつくのです。母親さえ、しまいには、ああこんな子なら生れない方がよっぽど幸だったと思う様になりました。仲間の家鴨からは突かれ、鶏つ子からは羽でぶたれ、裏庭の鳥達に食物を持つて来る娘からは足で蹴られるのです。

堪りかねてその子家鴨は自分の棲家をとび出してしまいました。その途中、柵を越える時、垣の内にいた小鳥がびつくりして飛び立ったものですから、

「ああみんなは僕の顔があんまり変なもんだから、それで僕を怖がったんだな。」と、思いました。それで彼は目を瞑って、なおも遠く飛んで行きますと、そのうち広い広い沢地の上に来ました。見るとたくさん野鴨が住んでいます。子家鴨は疲れと悲しみになやまされながらここで一晚を明しました。

朝になって野鴨達は起きてみますと、見知らない者が来ているので目をみはりま

した。

「一体君はどういう種類の鴨なのかね。」

そう言つて子家鴨の周りに集まつて来ました。子家鴨はみんなに頭を下げ、出来るだけ恭しい様子をしてみせましたが、そう訊ねられた事に対しては返答が出来ませんでした。野鴨達は彼に向つて、

「君はずいぶんみつともない顔をしてるんだねえ。」

と、云い、

「だがね、君が僕達の仲間をお嫁にくれつて言いさえしなけりや、まあ君の顔つきくらいどんなだつて、こっちは構わないよ。」

と、つけ足しました。

可哀そうに！ この子家鴨がどうしてお嫁さんを貰う事など考えていたでしょう。彼はただ、蒲の中に寝て、沢地の水を飲むのを許されればたくさんだったのです。こうして二日ばかりこの沢地で暮していますと、そこに二羽の雁がやつて来ました。それはまだ卵から出て幾日も日の経たない子雁で、大そうこましくくれました。その一方が子家鴨に向つて言うのに、

「君、ちよつと聴き給え。君はずいぶん見つともないね。だから僕達は君が氣に入つちまつたよ。君も僕達と一緒に渡り鳥にならないかい。ここからそう遠くない処にまだほかの沢地があるがね、そこにやまだ嫁かない雁の娘がいるから、君もお嫁さんを貰うといいや。君は見つともないけど、運はいいかもしれないうよ。」

そんなお喋りをしていますと、突然空中でポンポンと音がして、二羽の雁は傷ついて水草の間に落ちて死に、あたりの水は血で赤く染りました。

ポンポン、その音は遠くで涯しなくこだまして、たくさん雁の群は一せいに蒲の中から飛び立ちました。音はなおも四方八方から絶え間なしに響いて来ます。

狩人がこの沢地をとり囲んだのです。中には木の枝に腰かけて、上から水草を覗

くのもありました。猟銃から出る青い煙は、暗い木の上を雲の様に立ちのぼりました。そしてそれが水上を渡って向うへ消えたと思うと、幾匹かの猟犬が水草の中に跳び込んで来て、草を踏み折り踏み折り進んで行きました。可哀そうな子家鴨がどれだけびつくりしたか！ 彼が羽の下に頭を隠そうとした時、一匹の大きな、怖ろしい犬がすぐ傍を通りました。その顎を大きく開き、舌をだらりと出し、目はきらきら光らせているのです。そして鋭い歯をむき出しながら子家鴨のそばに鼻を突っ込んでみた揚句、それでも彼には触らずにどぶんと水の中に跳び込んでしまいました。

「やれやれ。」

と、子家鴨は吐息をついて、

「僕は見つともなくて全く有難い事だった。犬さえ噛みつかないんだからねえ。」と、思いました。そしてまだじつとしていますと、猟はなおもその頭の上ではげしく続いて、銃の音が水草を通して響きわたるのです。あたりがすっかり静まりきったのは、もうその日もだいぶん晩くなってからでしたが、そうなくてもまだ哀れな子家鴨は動こうとしませんでした。何時間かじつと坐って様子を見ていましたが、それからあたりを丁寧にもう一遍見廻した後やつと立ち上って、今度は非常な速さで逃げ出しました。畑を越え、牧場を越えて走って行くうち、あたりは暴風雨になって来て、子家鴨の力では、凌いで行けそうもない様子になりました。やがて日暮れ方彼は見すばらしい小屋の前に来ましたが、それは今にも倒れそう。ただ、どっち側に倒れようかと迷っているためにばかりまだ倒れずに立っている様な家でした。あらしはますますつのる一方、子家鴨にはもう一足も行けそうもなくなりました。そこで彼は小屋の前に坐りましたが、見ると、戸の蝶番が一つなくなっていて、そのために戸がきつちり閉っていません。下の方でちようど子家鴨がやつと身を滑り込ませられるくらい透いでいるので、子家鴨は静かにそこ

からしのび入り、その晩はそこで暴風雨を避ける事にしました。

この小屋には、一人の女と、一匹の牡猫と、一羽の牝鶏とが住んでいるのでした。猫はこの女御主人から、

「悴や。」

と、呼ばれ、大の御ひいき者でした。それは背中をぐいと高くしたり、喉をごろごろ鳴らしたり逆に撫でられると毛から火の子を出す事まで出来ました。牝鶏はというと、足がばかに短いので

「ちんちくりん。」

と、いう綽名を貰っていましたが、いい卵を生むので、これも女御主人から娘の様に可愛がられています。

さて朝になって、ゆうべ入って来た妙な訪問者はすぐ猫達に見つけられてしまいました。猫はごろごろ喉を鳴らし、牝鶏はクツクツ鳴きたてはじめました。

「何だねえ、その騒ぎは。」

と、お婆さんは部屋中見廻して言いましたが、目がぼんやりしているものですから、子家鴨に気がついた時、それを、どこかの家から迷って来た、よくふとつた家鴨だと思つてしまいました。

「いいものが来たぞ。」

と、お婆さんは云いました。

「牡家鴨でさえなけりやいいんだがねえ、そうすりや家鴨の卵が手に入るといふもんだ。まあ様子を見てやろう。」

そこで子家鴨は試しに三週間ばかりそこに住む事を許されましたが、卵なんか一つだって、生れる訳はありませんでした。

この家では猫が主人の様にふるまい、牝鶏が主人の様に威張っています。そして何かというと

「我々この世界。」

と、言うのでした。それは自分達が世界の半分ずつだと思っ
ているからなのです。ある日牝鶏は子家鴨に向つて、

「お前さん、卵が生めるかね。」

と、尋ねました。

「いいえ。」

「それじゃ何にも口出しなんかする資格はないねえ。」

牝鶏はそう云うのでした。今度は猫の方が、

「お前さん、背中を高くしたり、喉をごろつかせたり、火の子を出したり出来るかい。」「

と、訊きます。

「いいえ。」

「それじゃ我々偉い方々が何かものを言う時でも意見を出しちやいけないぜ。」

こんな風に言われて子家鴨はひとりで滅入りながら部屋の隅つこに小さくなつていました。そのうち、温い日の光や、そよ風が戸の隙間から毎日入る様になりそうになると、子家鴨はもう水の上を泳ぎたくて泳ぎたくて堪らない気持が湧き出して来て、とうとう牝鶏にうちあけてしまいました。すると、

「ばかな事をお言いでないよ。」

と、牝鶏は一口にけなしつけるのでした。

「お前さん、ほかにする事がないもんだから、ばかげた空想ばつかしする様になるのさ。もし、喉を鳴したり、卵を生んだり出来れば、そんな考えはすぐ通り過ぎちまうんだがね。」

「でも水の上を泳ぎ廻るの、実際愉快なんですよ。」

と、子家鴨は言いかえました。

「まあ水の中にくぐってごらんささい、頭の上に水が当る気持のよさったら！」

「気持がいいだつて！ まあお前さん気でも違ったのかい、誰よりも賢いこの猫さんにでも、女御主人にでも訊いてごらんよ、水の中を泳いだり、頭の上を水が通るのがいい気持だなんておっしゃるかどうか。」

牝鶏は躍気になつてそう言うのでした。子家鴨は、

「あなたにや僕の気持が分らないんだ。」

と、答えました。

「分らないだつて？ まあ、そんなばかげた事は考えない方がいいよ。お前さんこ

こに居れば、温かい部屋はあるし、私達からはいろんな事がならえるというもの。

私はお前さんのためを思つてそう言つて上げるんだがね。とにかく、まあ出来るだけ速く卵を生む事や、喉を鳴す事を覚える様におし。」

「いや、僕はもうどうしてもまた外の世界に出なくちやいられない。」

「そんなら勝手にするがいいよ。」

そこで子家鴨は小屋を出て行きました。そしてまもなく、泳いだり、潜つたり出来る様な水の辺りに来ましたが、その醜い顔容のために相変らず、他の者達から邪魔にされ、はねつけられてしまいました。そのうち秋が来て、森の木の葉はオレンジ色や黄金色に變つて来ました。そして、だんだん冬が近づいて、それが散ると、寒い風がその落葉をつかまえて冷い空中に捲き上げるのでした。霰や雪をもよおす雲は空に低くかかり、大鳥は羊齒の上に立つて、

「カオカオ。」

と、鳴いています。それは、一目見るだけで寒さに震え上つてしまいそうな様子でした。目に入るものみんな、何もかも、子家鴨にとっては悲しい思いを増すばかりです。ある夕方の事でした。ちょうどお日様が今、きらきらする雲の間に隠れた後、水草の中から、それはそれはきれいな鳥のたくさん群が飛び立つて来ました。

子家鴨は今までにそんな鳥を全く見た事がありませんでした。それは白鳥という鳥で、みんな眩いほど白く羽を輝かせながら、その恰好のいい首を曲げたりしています。そして彼等は、その立派な翼を張り拡げて、この寒い国からもつと

暖い国へと海を渡って飛んで行く時は、みんな不思議な声で鳴くのでした。

子家鴨はみんなが連れだって、空高くだんだんと昇って行くのを一心に見ているうち、奇妙な心持で胸がいつぱいになってきました。それは思わず自分の身を車か何ぞの様に水の中に投げかけ、飛んで行くみんなの方に向って首をさし伸べ、大きな声で叫びますと、それは我ながらびつくりしたほど奇妙な声が出たのでした。

ああ子家鴨にとって、どうしてこんなに美しく、仕合せらしい鳥の事が忘れる事が出来たでしょう！ こうしてとうとうみんなの姿が全く見えなくなると、

子家鴨は水の中にぼつくり潜り込みました。そしてまた再び浮き上って来ました。が、今はもう、さっきの鳥の不思議な気持ちにすっかりとらわれて、我を忘れるくらいです。それは、さっきの鳥の名も知らなければ、どこへ飛んで行ったのかも知りませんでしたけれど、生れてから今までに会ったどの鳥に対しても感じた事のない気持ちを感じさせられたのでした。子家鴨はあのきれいな鳥達を嫉ましく思ったのではありませんでしたけれども、自分もあんなに可愛らしかったらなあとは、しきりに考えました。可哀そうにこの子家鴨だって、もとの家鴨達が少し元氣をつける様にしてさえくれれば、どんなに喜んでみんなと一緒に暮らしたでしょうに！

さて、寒さは日々にひどくなって来ました。子家鴨は水が凍ってしまった様にと、しよつちゆう、その上を泳ぎ廻っていなければなりませんでした。けれども夜毎々々に、それが泳げる場所は狭くなる一方でした。そして、とうとうそれは固く固く凍ってきて、子家鴨が動くと水の中の氷がめりめり割れる様になったので、子家鴨は、すっかりその場所が氷で、閉ざされてしまわない様力限り脚で水をばちやばちや掻いていなければなりませんでした。そのうちしかしもう全く疲れ

きつてしまい、どうする事も出来ずにぐったりと水の中で凍えてきました。

が、翌朝早く、一人の百姓がそこを通りかかって、この事を見つけたのでした。

彼は穿いていた木靴で氷を割り、子家鴨を連れて、妻のところに戻って来ました。

温まってくるとこの可哀そうな生き物は息を吹きかえして来ました。けれども

子供達がそれと一緒に遊ぶうとしかけると、子家鴨は、みんながまた何か自分に

たずらをするのだと思ひ込んで、びっくりして跳び立って、ミルクの入っていたお

鍋にとび込んでしまいました。それであたりはミルクだらけという始末。おかみさ

んが思わず手を叩くと、それはなおびっくりして、今度はバタの桶やら粉桶やらに

脚を突っ込んで、また匍い出しました。さあ大変な騒ぎです。おかみさんはきいきい

言つて、火箸でぶとうとするし、子供達もわいわい燥いで、捕えようとするはず

みにお互いにぶつかって転んだりしてしまいました。けれども幸いに子家鴨はう

まく逃げおおせました。開いていた戸の間から出て、やっと叢の中まで辿り着

いたので。そして新たに降り積った雪の上に全く疲れた身を横たえたのでした。

この子家鴨が苦しい冬の間に遭った様々な難儀をすっかりお話しした日には

それはずいぶん悲しい物語になるでしょう。が、その冬が過ぎ去ってしまったと

き、ある朝、子家鴨は自分が沢地の蒲の中に倒れているのに気がついたのです。そ

れは、お日様が温く照っているのを見たり、雲雀の歌を聞いたりして、もうあたり

がすっかりきれいな春になっているのを知りました。するとこの若い鳥は翼で

横腹を搦ってみました。それは全くしつかりしていて、彼は空高く昇りはじめ

ました。そしてこの翼はどんどん彼を前へ前へと進めてくれます。で、とうとう、

まだ彼が無我夢中である間に大きな庭の中に来てしまいました。林檎の木は今

いっぱいの花ざかり、香わしい接骨木はビロードの様な芝生の周りを流れる小川

の上にその長い緑の枝を垂れています。何もかも、春の初めのみずみずしい色で

きれいな眺めです。このとき、近くの水草の茂みから三羽の美しい白鳥が、羽

をそよがせながら、滑らかな水の上を軽く泳いであらわれて来たのでした。子家鴨はいつかのあの可愛い鳥を思い出しました。そしていつかの日よりもっと悲しい気持になつてしまいました。

「いっそ僕、あの立派な鳥んとこに飛んでつてやろうや。」
と、彼は叫びました。

「そうすりやあいつ等は、僕がこんなにみつともない癖して自分達の傍に来るなんて失敬だつて僕を殺すにちがいない。だけど、その方がいいんだ。家鴨の嘴で突かれたり、牝鶏の羽でぶたれたり、鳥番の女の子に追いかけられるなんかより、どんなにいいかしれやしない。」

こう思つたのです。そこで、子家鴨は急に水面に飛び下り、美しい白鳥の方に、泳いで行きました。すると、向うでは、この新しくやつて来た者をちらつと見ると、すぐ翼を拡げて急いで近づいて来ました。

「さあ殺してくれ。」

と、可哀そうな鳥は言つて頭を水の上に垂れ、じつと殺されるのを待ち構えました。が、その時、鳥が自分のすぐ下に澄んでいる水の中に見つけたものは何でしたらう。それこそ自分の姿ではありませんか。けれどもそれがどうでしょう、もう決して今はあのくすぶつた灰色の、見るのも厭になる様な前の姿ではないのです。いかに上品で美しい白鳥なのです。百姓家の裏庭で、家鴨の巢の中に生れようともし、それが白鳥の卵から孵る以上、鳥の生れつきには何のかわりもないのでした。で、その白鳥は、今となつてみると、今まで悲しみや苦しみにさんざん出遭つた事が喜ばしい事だつたという気持にもなるのでした。そのためにかえつて今自分とり囲んでいる幸福を人一倍楽しむ事が出来るからです。御覧なさい。今、この新しく入つて来た仲間を歓迎するしるしに、立派な白鳥達がみんな寄つて、めいめいの嘴でその頸を撫でているではありませんか。

幾人かの子供がお庭に入つて来ました。そして水にパンやお菓子を投げ入れました。

「やつ！」

と、一番小さい子が突然大声を出しました。そして、

「新しく、ちがったのが来てるぜ。」

そう教えたものでしたら、みんなは大喜びで、お父さんやお母さんのところへ、雀躍しながら馳けて行きました。

「ちがった白鳥がいます、新しいのが来たんです。」

口々にそんな事を叫んで。それからみんなもつとたくさんのパンやお菓子を貰つて来て、水に投げ入れました。そして、

「新しいのが一等きれいだね、若くてほんとにいいね。」

と、賞めそやすのでした。それで年の大きい白鳥達まで、この新しい仲間の前でお辞儀をしました。若い白鳥はもうまったく気まりが悪くなって、翼の下に頭を隠してしまいました。彼には一体どうしていいのか分らなかったのです。ただ、こう幸福な気持ちでいっぱい、けれども、高慢な心などは塵ほども起しませんでした。

見つともないという理由で馬鹿にされた彼、それが今ほどの鳥よりも美しいと云われているのではありませんか。接骨木までが、その枝をこの新しい白鳥の方に垂らし、頭の上ではお日様が輝かしく照りわたっています。新しい白鳥は羽をさらさら鳴らし、細っそりした頸を曲げて、心の底から、

「ああ僕はその見つともない家鴨だった時、実際こんな仕合せなんか夢にも思わなかったなあ。」

と、叫ぶのでした。

底本：「小学生全集第五巻 アンデルゼン童話集」興文社、文藝春秋社
1928（昭和3）年8月1日発行

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。